

## 未来の国語教育の方向性

キーワード：価値目標 資質能力 習得 活用

広島大学 難波博孝

### 1. 「検討会」から示された内容

2014年3月に示された「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」（以下「検討会」）の論点整理の内容を私なりにまとめてみました。

① 「児童生徒に育成すべき資質・能力」を明確にし、「教科の目標・内容」と区別すること

①については、従来の学習指導要領や教育現場が、「児童生徒に育成すべき資質・能力」（以下「資質・能力」）を意識していなかったわけではないが、やはり「教科の目標・内容」に偏っていたという問題意識から、「資質・能力」を改めて明確にし、「教科の目標・内容」との関連を密接につなごうとしています。「資質・能力」の一例として「検討会」の論点整理で示されたのは、次のものです。

「主体性・自律性に関わる力」「対人関係能力」「課題解決力」「学びに向かう力」「情報活用能力」「グローバル化に対応する力」「持続可能な社会づくりに関わる実践力」「主体性をもって学力」「優しさ」「感性」

これらの「資質・能力」を「教科の目標・内容」と区別し、さらに両者の関係を学習指導要領などで明確にすることを「検討会」は求めています。

② 「教科の目標・内容」を三つに整理したこと

「検討会」では、「教科の目標・内容」を以下の三つに分けて整理しています。

(ア) 教科等を横断する汎用的なスキル

「問題解決」「論理的思考」「コミュニケーション」「意欲」「メタ認知」

(イ) 教科等の本質に関わるもの（教科等ならではの見方・考え方など）

「エネルギーとは何か」「教科特有のものの見方・考え方、処理や表現方法」

(ウ) 教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの

「乾電池」についての知識」「検流計」の使い方」

### ③ 「資質・能力」に対応した学習評価

ここでは特に、パフォーマンス評価を重視する必要が述べられています。

### 2. 「検討会」論点整理をどう受け止めるか

以上のような「検討会」の論点整理を、私たちはどのように受け止めればいいのでしょうか。

ここでは、「資質・能力」から考えてみたいと思います。「検討会」で報告された「資質・能力」は、確かにこれを明確にすることで教育の道筋が見えやすくなることは間違いありません。また、「検討会」の論点整理で示された「資質・能力」はどれもこれからの社会形成・社会参加にとって必要なものに違いありません。

特に重要なのは、「資質・能力」と「教科の目標・内容」とを区別した上で関連付けようとしたことです。各教科にはそれぞれ目標・内容があります。しかし、それらの目標・内容が、これからの社会を生きる子どもたちの「資質・能力」形成にどう関わっているかを見ないまま、ただその教科の目標・内容を教えるだけに終わること、つまり、「学校知」とどまり「生活知」「社会知」とならないことは、大きな日本の教育課題です。

例えば、国語科中学年の指導事項に「文学教材における登場人物の性格や心情の変化をとらえる」というのがあります。これは文学教材を読む上では重要な目標・内容と考えられるとは思いますが、どのような「資質・能力」の形成につながると考えられるのでしょうか。また、どのように「資質・能力」とつなげていかなければならないのでしょうか。こういった、「教科の目標・内容」と「資質・能力」とをつないでいくという考えを持たないと、教科の学びは、人間としての学びに確かになっていかないのです。

### 3. 「資質・能力」についての困難

一方で、「検討会」で示された「資質・能力」を考えたり、具体化したりするにはいくつかの困

難があります。

一つ目は、「資質・能力」が際限なく増える、「資質・能力」のインフレーションという問題です。社会形成・社会参加のために必要な「資質・能力」は考えれば無限にあります。その中からどれを選ぶか、どのようなカテゴリーを設定するかは、結局、提案する人の「教育観」「社会観」に左右されます。したがって、教育政策に関わる人が多ければ多いほど、提案される「資質・能力」は際限なく多くなり、整理していこうとすると抽象的になってしまうか、鶴（ぬえ）のように得体的にしない概念になってしまうのです。

二つ目は、いろいろなところから「資質・能力」が提案されるのですが、そのそれぞれが孤立していてつながって見えない、「資質・能力」群の乱立という問題です。「検討会」の論点整理には、いろいろなところから提案された「資質・能力」が次のように挙げられています。

「基礎的・汎用的能力」「課題探求能力」「学士力」「社会人基礎力」

このようにいろいろな団体などが提案した「資質・能力」相互を整理しようとする試みもあります。しかし、それぞれの団体などはそれぞれの背景があって提案しています。したがって、それぞれの団体などが提案した「資質・能力」を整理するのは難しく、結局はさまざまな「資質・能力」群が、乱立することになります。

三つ目は、「資質・能力」のタイムラグの問題です。いろいろな団体などが提案する「資質・能力」は、先述したように背景があって提案しています。その背景は、当然のことながら、その団体などが考える現在および未来の社会をどう捉えるかに関わっています。社会が動けば当然提案される「資質・能力」も変化します。

しかし、初等中等教育への提案となると話は変わります。今10歳の子どもに、未来はこうなるはずだからこういう「資質・能力」が必要だとある団体が述べたとしても、その子どもが社会に出るときには、想定された社会とは異なっているかもしれない、その社会に必要な「資質・能力」も変わっているかもしれません。このことまでを見通した、「資質・能力」の提案が必要になってきます。

最後の困難は、「資質・能力」と「教科の目標・

内容」とのつながりを決める難しさです。

仮に、「資質・能力」が明確になったとして、それと「教科の目標・内容」とをどのようにつないでいけばいいのでしょうか。おそらく、複数の教科の、複数の「教科の目標・内容」が集まって、「資質・能力」を形成すると考えられはします。しかし、例えば「検討会」の論点整理で「資質・能力」の一つとして示された「対人関係能力」には、どのような教科のどのような「教科の目標・内容」が関係するのでしょうか。これを考えることはとても難しいことで、おそらく何年もかかる研究の結果見えてくるはずのことでしょう。

また、「検討会」の論点整理では、「教科の目標・内容」として、「教科等を横断する汎用的なスキル」が挙げられています。ここには、「論理的思考」「コミュニケーション」などが挙げられていました。これらと、「資質・能力」とは非常によく似たものに見えます。両者はどのような関係になるのでしょうか。

「資質・能力」について考えたり、具体化したりするには以上のような困難があるのです。

#### 4. 国語教育として受け止める枠組み

今後、「検討会」で議論が進んでいくと報告が出され次の学習指導要領に反映されていくでしょう。そのような動きを受けとめつつ翻弄されないように、また、先に述べたような困難を乗り越えるために、私たち教育関係者はどのようにすればいいのでしょうか。特に国語教育の立場から考えてみたいと思います。

大事なことは、今後出されるであろう「資質・能力」等に関する提案や新しい学習指導要領を受け止める枠組みを前もって用意しておく必要があることです。

私は、さまざまな論考で、国語教育の目標の枠組みを以下のようにシンプルに捉えてきました。

(難波博孝他(2011)「学習指導要領から考える、読むことの授業づくり」国語科授業論叢3号(インターネットで読めます)などに書いてあります)

国語教育の「教科の目標・内容」＝態度目標＋価値目標＋技能目標

一つ目は、態度目標です。これは、興味や関心、意欲や態度に関する目標です。この態度目標形成ができなければ、以後の学習は成立しないでしょう。

う。この態度目標は、当面の授業や単元への態度形成といった短期的な態度目標から、一生涯学びを続けていくという超長期的な態度目標まで考えられます。

二つ目は、価値目標です。価値目標とは、価値観にかかわる目標であり、言い換えれば、ものの見方や考え方という目標です。「知識」「技能」そのものではなく、それらを支えている価値観、メタ認知、信念、そういったことにかかわる目標です。

実は現行の国語科学習指導要領読むことの領域にも、価値目標に関わる指導事項が挙げられています。それは、(オ)です。(オ)は、「経験(低学年)」「感じ方(中学年)」「考え(低学年・高学年)」といった言葉で、表現されていることを、最終的には「広げたり深めたりする(高学年)」ということをおねらっています。

三つ目は、技能目標です。これは、国語科におけるさまざまな知識や技能のことであり、学習指導要領の指導事項のほとんどがこれにあたります。

このように分けることは、次のような利点があります。それは、今後提案される「資質・能力」を、まずは価値目標として受け止めていく、ということです。そして、無理に「教科の目標・内容」とつなぐのではなく、読むことの教育なら読むことの単元の中で、「教科の目標・内容」を担う技能目標と「資質・能力」を担う価値目標との両方を狙っていくということです。

一例を挙げましょう。例えば、小学校四年生の教材「ごんぎつね」では、小学校中学年の指導事項である「文学教材における登場人物の性格や心情の変化をとらえる」を技能目標とすることができでしょう。

一方で、この物語は、人と人との関わり、分かれ合いがいかに難しいかをあらわしていますから、価値目標として「人と人との関わり合いについて自分の考え方を深める」という項目を設定することが可能です。この価値目標は、「資質・能力」で提案された「対人関係能力」や「教科の目標・内容」の汎用的スキルで提案された「コミュニケーション」と大きく関わってきます。

「ごんぎつね」の教材の学習を通して、「ごんや兵十の性格や心情の変化をとらえる」技能目標

を達成しつつその成果を踏まえて、ごんと兵十はなぜわかりあえなかったのか、どうすればよかったのかを考えるのです。ここが価値目標達成に向かうところです。

価値目標も態度目標同様、短期的な目標(本時あるいは単元での達成)から超長期的な目標(一生涯にわたって達成)まであります。「ごんぎつね」の学習では、まずはごんと兵十の関わりについて自分なりの考えを持つという短期的な目標を達成し、それをさまざまな教材や他教科でも積み重ねて行うことで、人と人との関わり合いについての考えを深めること、つまり「対人関係能力」の形成を図るのです。

つまり、「教科の目標・内容」は技能目標として受けとめ、「資質・能力」は価値目標として受けとめ、それぞれを、具体的な教材、単元、授業の中で結び付けて、しかも短期的～超長期的視点から達成していくのです。「ごんぎつね」を例にあげて、また、態度目標も合わせて、まとめておきます。

小学校4年生国語科教材「ごんぎつね」の単元の場合

- 技能目標＝「文学教材における登場人物の性格や心情の変化をとらえる」←「教科の目標・内容」
- 価値目標＝「人と人との関わり合いについて自分の考え方を深める」←「資質・能力」(「対人関係能力」)
- 態度目標＝「物語を積極的に読もうとする態度を形成する」

## 5. これからの国語教育で考えるべきこと

上で述べたような方向で国語教育が受け止めていくために、考えなくてはいけないことを三つ述べます。

一つ目は、技能目標(「教科の目標・内容」)の知識部分の開発です。学習指導要領や実際の授業では、「登場人物の心情の変化をとらえる」「事実と意見との関係をとらえる」といった技能部分が前面に出ます。しかし、いざ実際の授業をやる段において、具体的にどうすれば心情の変化が捉えられるのか、事実と意見との関係が捉えられるのか、難しいのです。それは、技能部分を支える知識部分が明示されていないからです。

「登場人物の心情の変化をとらえる」ためには、

心情を表わす語句に注目しなければなりません。それは、副詞であったり形容詞であったりするし、また動作を表す動詞に暗黙に表現されていたりします。そのような語句に意識的に注目させることが必要です。「事実と意見との関係をとらえる」場合も、接続語や文末表現はもちろん、それらにはあらわれない「かくれた論理」をつかむために、論理構造図（段落構造図ではなく）で表現するという知識をもっていなければなりません。今後国語教育においては、このような読むこと・書くこと・話すこと・聞くことの技能部分を支える知識部分を明示化し、教えていく（習得させていく）必要があります。

二つ目は、技能目標の技能部分や知識部分を、端的に教える習得の授業と、それを、言語活動を使って活用させていく授業とを明確に区別し展開していくことです。前者の授業については、例えば、国語科教科書に最近採用されるようになった「学習用語」のページなどを使って、技能部分や知識部分を確実に短時間に積み重ねて習得させていくことです。

一方で、教科書教材を使った単元では、具体的な言語活動の中で、培った技能部分や知識部分を活用させる授業を展開するべきでしょう。教科書の文章から、心情を表わす副詞や形容詞、動詞をただ拾い上げさせノートに書いて発表させる、単調でつまらない授業ではなく、例えば「ごとと兵十の心情曲線を描こう」という言語活動を展開する中で、心情を表す語句に注目させていくのです。このように、習得の授業と活用の授業とを、教材から時間、単元のレベルではっきり分けて行っていくべきでしょう。

三つ目は、価値目標（「資質・能力」）に直接つながる技能目標を達成するような授業を作ることです。「検討会」の論点整理にあった「資質・能力」の一つ「課題解決力」やその中で大きな位置を占めるであろう、「教科の目標・内容」の汎用的スキルの一つである「論理的思考」は、私が先に示した枠組みでは価値目標と置くことができます。それらは、具体的な教材を学習する中で、国語科の技能目標（国語科としての「教科の目標・内容」）を達成するとともに達成していくということは、先に述べました。

しかし、それだけは、なかなかこれらの「資質・

能力」を意識化することは難しいものです。そこで、「課題解決力」や「論理的思考」そのものを支える技能・知識を直接習得する授業を設定する必要があります。つまり、「課題解決力」や「論理的思考」を直接習得し練習する授業を行うのです。

以上のことをまとめ、授業と目標との関係で示すと次のようになります。

授業Ⅰ

技能目標の知識部分を習得する授業（習得授業Ⅰ）

授業Ⅱ

価値目標の知識部分を習得する授業（習得授業Ⅱ）

授業Ⅲ

技能目標の技能や知識を言語活動によって活用しつつ  
価値目標の達成もめざす授業（活用授業）

未来の国語科は、今後提案されるであろう「資質・能力」については価値目標の項目として、「教科の目標・内容」は技能目標の項目として受け止めつつ、授業ⅠⅡⅢという三つのタイプの授業を展開していく方向を目指すべきだと考えます。また、このような方向が明確に示された実践を私たちは準備しなければならないのです。

（本稿は、『教育の窓』（2014年9月号 東京書籍）掲載の論稿に加筆修正し『国語科教育実践の開拓と創造』（2015年3月 広島大学附属小学校国語科編）掲載した同名の論文を転載したものです）